

秋、とまどまな

音の調べを聴く

秋は音楽の季節。奏でる、創る、究める、伝えるなど、塾生、塾員、教員らの多彩な音楽活動を通じて、音楽の魅力を掘り下げます。

「音楽」の授業から生まれ、日吉の街に根付いた 慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会

自ら歌い・演奏すること
より深く音楽を学ぶ

「慶應義塾コレギウム・ムジクム」は、日本では極めてユニークなオーケストラ・合唱団です。

その特徴のひとつは、団員のほとんどが日吉キャンパスの一般教養共通科目（総合教育科目）の「音楽」を学ぶ1、2年の塾生であること（演奏会では先輩塾生、塾員など多少の援軍あり）。音楽学部を持たない大学で、授業の一環としてこれほどのオーケストラ・合唱団を組織するところは他に類を見ません。ベースにあるのは、日吉音楽学研究室が目指している、単なる知識や歴史教育にとどまらない音楽教養教育の構築。塾生が自ら実践することで、より深く音楽を理解し楽しむ環境が整えられています。

指導をするのは、合唱が佐藤望商学部教授、オーケストラは石井明経済学部准教授です。

「新しい音楽教養教育を模索して2001年にまず合唱から実践授業を始め、続いてオーケストラが生まりました。幸い義塾には歌唱と演奏の素養を持つ塾生がたくさん入学し、なかには幼い頃から学んでかなりのレベルに達している者もいます。そこで教育の一環として、コレギウム・ムジクムを組織してハ-

モニーの大切さを学び、その成果を演奏会で皆さんに聴いていただいています」（佐藤教授）

ふたつ目のユニークな点は、オーケストラの演奏曲を18世紀の曲に限定し、しかも当時の演奏法にこだわっていることです。

「ハイドンやモーツァルトが活躍した18世紀は、歌を伴わない器楽だけの合奏がようやく認知され始めた時期。その曲を同時代の演奏法で学ぶことは、新しい音楽世界をひらこうとしている作曲家の努力の過程を知ることができます。演奏はシンブルを心がけ、弦楽器はピブラートを極力控えます。2本のトランペットをはじめ、古楽器も使われています。塾生たちは慣れない奏法に初めは戸惑いますが、やがて清冽な美しいアンサンブルを作り出します」（石井准教授）

日吉の人々に愛され定着した 夏と冬の演奏会

大学の「音楽」の授業から始まったこの演奏会は、近年、地域との交流の場としての役割も果たすようになりました。

2002年から開始した無料の公開演奏会には日吉周辺の住民の



トランペットの古楽器

方々をはじめ、多くの人々がこの日を楽しみに集まります。

「コレギウム・ムジクムとは、平易にいうと「音楽の仲間」。テレマンがドイツのライプツィヒ大学で、学生に、町楽師や教会の音楽家を加えて編成したコレギウム・ムジクムが特に有名で、それはパッサに受け継がれて、地域に開かれた文化発信の拠点になりました。その意義を現代の日本で実践したいと思ひ、慶應義塾コレギウム・ムジクムと名付けました」（佐藤教授）

「欧米、とくにアメリカでは大学のホールが地域の文化拠点を担い、そこではさまざまなコンサートが開かれて地域の人たちの楽しみになっています。私たちも、日吉の地を大切に思い、皆さんに愛され楽しみにされる活動を続けていこうと思っています」（石井准教授）

1月に協生館藤原洋記念ホールで行われた冬期演奏会は、横浜市主催のクラシック・ヨコハマ参加企画で、横浜市およびNPOの協力を得て、多くの聴衆が集まりました。これも地域に根付いている証拠のひとつです。

7月15日に来往舎イベントテラスで行われた慶應義塾コレギウム・ムジクム演奏会にも、たくさん聴衆が集まり、塾生が奏でるメンデルスゾーンの合唱曲、ハイドンの交響曲、ヘンデルの「メサイア」の演奏を心ゆくまで楽しみました。ソプラノからバスまで四声の美しい合唱と古典奏法のピュアな管弦楽が溶け合った音楽を奏でる塾生たち、そして静かに耳を傾ける多くの聴衆たち。この幸福な時間の共有こそ、音楽の醍醐味に違いありません。次回は来年1月開催の予定です。



おおわだとしゆき
大和田 俊之
法学部准教授

アメリカポピュラー音楽を栄養に 独特の魅力を育てたJ-POP

アメリカ音楽発展のベースは 白人と黒人間の緊張とダイナミズム

今春まで「アメリカン・ポピュラー・ミュージックの文化史」の講座を持っていた大和田准教授は、現在アメリカ留学中。そこで「藝」ではテレビ電話インタビューを敢行しました。——6月25日にマイケル・ジャクソンが亡くなりましたが、ニューヨークの様子はどうでしたか？

大和田 マイケルはマドンナ、プリンスとともに僕も中高生時代によく聴いたシンガーです。訃報を聞いて彼のスターへの出発点、ハレムのアポロシアターに行ったのですが、たくさんファンが集まって、偉大なポップスターをしのいでいました。ちやつかりTシャツを売っている人もいました(笑)。

——マイケルは80年代のスターですが、第二次世界大戦後に最初の世界的スターになったのがエルヴィス・プレスリーですね。

大和田 プレスリーの登場は1950年代半ばです。黒人音楽のリズム・アンド・ブルースと白人のカントリーを融合させたロックンロールを大ヒットさせました。その約100年前のこと、19世紀半ばのアメリカでは「ミンストレル・ショー」という大衆芸能の見世物が流行していました。顔を黒塗りにした白

人が黒人のマネをして笑いをとるという、現在なら差別的と非難されるショーですが、これが大人気だったのです。マイケルは肌を白くして白人を意識したし、プレスリーの腰を激しく振るスタイルはもともとは黒人のもの。つまりアメリカのポピュラー音楽は、白人と黒人の人種間の緊張とダイナミズムの相互作用をベースにして発展してきたといえます。現在はヒスパニックの人口が黒人を抜き、新たな音楽のダイナミズムが生まれています。

——プレスリー以後はアメリカ発の音楽が世界を席捲、イギリスからビートルズが出てきたのも、その影響だといわれています。

大和田 彼らがアメリカ音楽を参照していたのは間違いないですね。ただ、ビートルズ以降のロックは、それまでのジャズやブルースの3連符ではなく平板な8ビートが主流です。これは彼らの演奏技術が未熟だったからともいえます(笑)、そのアマチュアリズムこそロックの特性の一つですからね。

洋楽を「歌謡曲」に取り込んで 厚みを増し、創造性を高めた

——ところで日本では、プレスリーが出るとロカビリーがやはり、ロックグループが出るのとグループサウンドスが人気を得て、フォークもヒップホップもはまりました。アメリカの影響は顕著なのですか、日本のポピュラー音楽をどう見えていますか？

大和田 明治以降、日本は日本的なものを温存しながらも西洋文化を巧妙に取り入れると

いう二重構造で発展したのですが、ポピュラー音楽も同じことが言えます。そのキーワードは「歌謡曲」です。ジャズといいながらハワイアンからラテンまで含む音楽を食欲に吸収し、その後のポップスもロックもフォークも大きくりの歌謡曲の中に溶け込ませてきました。そして、多くの日本人は和と溶け合った欧米のポピュラーミュージックを楽しんできたのです。その層の厚さと質の高さ考えるとJ-POPを含む「歌謡曲」は、もつと評価してもいいと思います。

最近講座でアンケートをとつても「洋楽を聴かない」という塾生が多いのですが、こうした「国内志向」は他のジャンルでも同じことが起きていて、僕は「勝手に鎖国状態」と呼んでいます。ただ、江戸時代にも文化の洗練はあつたわけで、これが一概に悪いことだとはいえません。

実際、僕が大学生だったころに比べても日本のロックやポップスは明らかに厚みを増していて、海外の音楽を聴く必要を感じないのかもしれない。たとえば日本のヒップホップの世界では、「レベゼン札幌」や「レベゼン京都」など自分たちの「地元」で活動する若者が目立っています。これはアメリカのヒップホップが元々持つ「地元志向」(Localism)が日本にも根付いた結果だともいえますが、そもそもアメリカのヒップホップを聴かない世代も出てきているんですよ。

洋楽ファンの間では長らく「ホンモノアメリカ」「ニセモノ日本」という図式が支配的でしたが、そろそろ日本のポピュラー音楽を独自の価値観で評価する視点が必要なのかもしれません。



秋、さまざまな音の調べを聴く

コンピュータを使って、最先端音楽のドアを開く

コンピュータ音楽の創造は、1950年代にコンピュータが実用化されてすぐに、現代音楽の作曲家たちによって始められている。楽器を使わず、音を合成して音楽を創り出すことは、前衛的な作曲家にとって極めて魅力的な試みだったのだ。一方、ポピュラーミュージックの世界では、坂本龍一らのイエロー・マジック・オーケストラ（YMO）がポップなコンピュータ音楽で一世を風靡した。そしていま、環境情報学部の岩竹徹教授は、コンピュータを用いて現代の Evolutionary Music の研究と作曲に取り組んでいる。



環境情報学部 岩竹徹 研究室

「SFC の重要なミッションは、分野は何であれ最先端の開拓。私たちは音楽の最先端のドアを開くべく研究を進め、多彩な成果を最高レベルの国際学会で数多く発表し、学術の世界で世界的な評価を得ています。これ



田中敏幸 理工学部教授

自分で楽器を弾きながら作ったメロディーを、録音してパソコンに通すだけで、譜面としてビジュアル化できるとしたら、

からはその研究成果を広く社会に役立つものとして、還元、定着させていくことが重要な課題です」

その成果は、サウンドデザインや環境音楽、効果音作曲などを通じて、徐々に社会に浸透しつつある。「街角でもどこでも、その場に即した音楽をコンピュータで作ることが出来ます。たとえば人が多く集まる駅やイベント会場などで、人の動きを解析し、その動きによって音楽を作りその場に返す実験なども行っています」

研究室の魚住勇太君（政策・メディア研究科後期博士課程3年）は、「コンピュータで音楽を育てる“研究に取り組んでいる。

「仮想の生態系を作り、人工生命を持つ細胞に遺伝子となる音を与え、これらの細胞たちが交配や突然変異、秩序を作る自己組織化などによって、互いに反応して紡ぎ出す音楽を研究しています。森のようなゆらぎの環境

を整えてやれば生き物にやさしい音楽が生まれるし、環境破壊を起こせばそれに反応して不快な音を発します」

「音楽の先端を拓く。岩竹研究室の他の学生たちにも、研究の面白さを聞いてみた。加々見翔太君（政策・メディア研究科修士課程2年）「趣味でDJをやっていて、最先端の音楽をDJに生かせないかと思っていました。論文を書くよりも自分で音楽を作ることが重要視されることが気に入っています」

花野井俊介君（環境情報学部1年）「今まで自分で考えていた音楽を超えるいろいろな新しい発見があり、自分のライブラリーがどんどん増え、作曲へのアプローチ法を学べます」

小山慶祐君（環境情報学部1年）「高校卒業後のバンド活動でコンピュータを使っていたのですが、もっと深く勉強するためにSFCに入りました。今後はプログラミングの音楽作りに取り組みたいです」

梅津麻悠子君（環境情報学部1年）「小学生の頃から曲を作り、パソコンやシンセサイザーも使っていました。でもこの研究室でコンピュータ音楽の深さと広がりを知り、刺激を受けているところです」

演奏するだけで譜面が作れる自動採譜システムの研究

自分で楽器を弾

きながら作ったメ

ロディーを、録音

してパソコンに通

すだけで、譜面と

してビジュアル化

できるとしたら、

どんなに便利だろう。

それに取り組んでいるのが田中敏幸教授の研究室である。同研究室では、医用画像、バイオメトリック認証、GPS測位など、信号処理と画像処理全般にわたり幅広く研究を進めているが、そのひとつが音声信号処理技術を用いての「自動採譜システム」の開発だ。

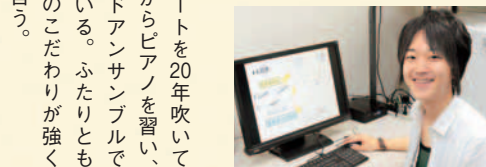
「10年ほど前にある学生が、信号処理を音楽でやってみたい、と言い出して始めた研究が、毎年学生たちに受け継がれながら「自動採譜システム」の開発へと繋がっています。彼らは皆バンドやオーケストラで、実際に音楽をやっている者ばかり。好きな音楽と工学の研究が結びついているのです」

音の高さは周波数で表される。これまでのフーリエ変換やウェーブレット変換など

を用いた研究で、演奏された曲から倍音を除去するなどして、たとえ和音であってもどの音が鳴っているのかは確定できるようになった。次の課題は音の長さを正確に求めることである。現在、研究を受け継いで進めているのは船越昇君（理工学部4年）だ。「先輩の研究で高さが特定できた音の長さが、何分音符なのか、また3連符か6連符かなどを正確に測定することに取り組んでいます。いま考えているのは、音の波をある式で表現し、その式があてはまらなくなったところを音が変わる瞬間と仮定して、長さが特定できないかと試行錯誤していると

ころです」音の高さと長さを特定できれば、自動的に採譜することができ、作った曲が譜面になり、採譜する手間が省ける。しかし、田中教授はもっと広い使い方ができると言う。「たとえば同じ譜面をもとに弾いても、演奏者によって音の強さや伸ばし方が異なります。自動採譜システムでは、その演奏をまるごと採譜することができると、良い例や悪い例としてチェックすることができます。強さや長さを記す独自の記譜ルールを加えることが必要ですが、これは教育の分野で役立つと思います」

優れた演奏家は、譜面を自分で解釈してオリジナルの素晴らしい演奏をする。それをこのシステムで自動採譜すれば、演奏の研究にも役立つと思う。



船越昇君 理工学部4年

明治以来の芸術教育の伝統を持つ義塾、アート・センターなどの研究所も充実



山崎 義塾 文学部教授
(アート・センター所長)

義塾の芸術教育の歴史は古く、1892（明治25）年に福澤先生が森鷗外を招き、「審美学」（後の美学）の講座を置いたことに始まります。あまり知られていませんが、鷗外は音楽用語を日本語に訳すなど、音楽への造詣の深い作家でした。

戦後、文学部に美学美術史学専攻が設置され、その中の専門科目として音楽史が開設されました。義塾には音楽が好きだけでなく演奏や研究をさらに深めたい学生が多く、音楽学の学習・研究体制は充実しています。

また歴史や音楽家研究だけでなく、広く音楽の創造、流通や消費について学ぶための科目として「アート・マネジメント」等がある

のも、義塾の特徴です。卒業生にはレコード会社、制作会社、音楽ホールなど音楽業界で活躍している人が多くいます。ただし芸術教育の目的は、業界に進む人材を育てることではありません。単にアートの消費者にとどまらず、より深く理解し、ときにはその擁護者となる、豊かな感性を持つ人間を育てることを目指しています。

慶應義塾大学アート・センターは、領域を超えたコラボレーションをする創造活動の研究、感性の宮みと社会を結ぶアート・マネジメントの研究など多岐にわたる活動をしています。また、舞踏の土方巽、シュルレアリスムを紹介した詩人・評論家で塾員の瀧口修造ジャズ評論の草分け的存在で塾員の油井正一のアーカイブは、遺品の保存を超えて、彼らの創造活動のプロセスに光をあてた研究から、

新しい資料を生むアクティブな「生成アーカイブ」として異彩を放っています。

図書館には、音楽評論家の遠山一行氏より寄贈された「遠山音楽文庫」、ミュージカル評論家の風早美樹氏寄贈の「風早ミュージカルコレクション」が収蔵されています。

義塾のそのほかの音楽関係の活動としては、紀州徳川家16代当主の徳川頼貞のコレクションであった「南葵音楽文庫」の資料デジタル化をDMC機構（デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構）が進めています。ここにはベーターヴェンやリストの自筆資料など貴重な文化遺産が含まれています。

付け加えるなら、慶應義塾はクラシックやジャズなど、各界で活躍する卒業生にも恵まれています。これも明治以来、芸術的な感性を大切にしている教育の歴史とアート・センターなどの研究機関を充実させてきた成果の一端であると思います。

音楽を究める

「アインクライネスオーケストラ (Ein-Klaines Orchester) は、ドイツ語で「小さなオーケストラ」という意味の言葉です。その名前の通り、比較的小規模の人数で活動しています。この楽団は、1990年の湘南藤沢キャンパス開設時のSFC1期生により創立され、SFCと同年、今年で20期目を迎えます。

メンバーは、幼少のころから楽器をやっていた人から、大学で楽器を始めた人まで、実にさまざま音楽的バックグラウンドを持っています。バックグラウンドはさまざまですが、純粹に音楽や楽器が好きな人間たちが集まり、最高のハーモニーを奏でる瞬間のために、練習を重ねています。

努力の成果は、毎年、定期演奏会で披露しています。今年は12月25日にブラームスの「交響曲第2番」をメインに演奏します。この交響曲は楽団の設立時から節目ごとにたびたび演奏している曲目でもあり、私たちにとってとても大切な曲です。当団の1年間の活動の集大成ともいえる定期演奏会、ぜひお越しください。

SFC発の“小さなオーケストラ”



生の音を求めて

軽音楽部(楽字部) 加藤 健太 かとう けんた

私たち薬学部の軽音楽部は、演奏ジャンルにとらわれることなく、幅広い音楽を楽しむ部活です。アットホームな雰囲気、ライブに向けて、それぞれのスキルや連帯感を高めるために日々練習に励んでいます。ライブはおおよそ2カ月に一度程度行われ、軽音楽部主催ライブはもちろん、多くの大学の軽音楽部とも提携をしてライブ活動を行っています。軽音楽部に入り本格的にライブハウスでのライブを経験することで、CD

とライブとの差に驚かされます。ライブは演奏者による自由な音楽表現の場であり、毎回違った音色を感じさせてくれます。音を耳で聴くのではなく、全身で音楽を聴くことができ、なにより、その一瞬の音や空気を一人ではなく、多くの人と共有することができる。そして、そこでは同じ趣味の仲間を見つけることもあるでしょう。

皆さんもライブに出向き、「生の音」を全身で感じる喜びを味わってみるのはいかがでしょうか？ きっと密度の濃い時間を過ごせるはずです。





伝統芸に親しむ

長唄研究会

遠藤 美貴

長唄とは、江戸時代に歌舞伎の下座音楽（わかりやすく言うとBGM）から発展した音楽で、複数人が演奏する三味線と唄で構成されており、福澤諭吉先生も長唄が好きだったといわれています。私たちが長唄研究会は、1937年に発足した歴史あるサークルです。部員は大学に入ってから始めた初心者ばかりですが、プロの先生にご指導いただきながら、演奏会に向けて日々、伝統音楽としての長唄に対する探求心を忘れず、曲の情景や風情を感じとり、演奏に生かしていきたいと意識して稽古しています。

現代では、長唄にも数々の流派があり、特徴を生かした演奏をしています。また、曲目も少人数でしつとりと聴かせる曲もあれば、小鼓、大鼓、太鼓、笛などで構成される「お囃子」が入ってにぎやかに演奏される曲もあります。

12月5日には日本橋社会教育会館にて第87回定期演奏会、そして12月27日には日本橋公会堂にて学生長唄連盟の定期演奏会があります。この機会に日本の伝統音楽に触れてみませんか？

娘たちの琴三味線と踊りを楽しむ 福澤家の家庭音楽会



「家庭音楽会」プログラム



妻女名義の家庭音楽会案内状

『福翁自伝』の「田行家風」の章、「初めて東京の芝居を見る」の段に、こんな記述がある。
 中津時代に藩主が催した田舎役者の芝居を1回、大阪修業中に市川海老蔵の興行を1回見ただけで、江戸の頃も東京になっても芝居には興味がなかった。しかし、ふとしたきっかけで芝居を見たことで詩ができた、という意味のことを記した後、その詩が型破りのものなので、「これを見ると私が変わ人のようにあるが、実は鳴り物は甚だ好きで、女の子には娘にも孫にも琴三味線を初め、また運動半分に踊りのけいこもさせて、老余唯一の楽しみにしています」とあるのだ。そのときの詩は、『福翁自伝』をあたって楽しんでもらうこととして、ここで注目したいのは「鳴り物は甚だ好きで」「娘にも孫にも琴三味線を」のくだりである。

さて、上の「素人音楽会番組」と記された福澤研究センター所蔵の資料を見ていただきたい。これは福澤邸で行われた「家庭音楽会」のプログラムである。1893（明治26）年頃のものだから、福澤先生は60歳前後ということになる。

上に演目が並び、その下には演奏者の名前が記されている。福澤たきとあるのは四女の滝、福澤みつとあるのは五女的光だと思われる。その他、義塾の教職員の浜野定四郎、小幡篤次郎らの娘たちの名前もあり、この音楽会が福澤先生の娘と近い者の娘たちを奏者演者にして開いた、琴三味線と踊りを楽しむ会であったことがわかる。

もうひとつの資料は、夫人の錦の名で出された家庭音楽会への招待状である。「鳴りもの」と「御膳」を「差上」とあり、友人知人を招いて、酒食とともに娘たちの芸を楽しむ福澤家の家庭音楽会の様子が彷彿とする。

福澤先生はぎっくばらんに世情を語り、情報を交換する人間交際の機会として懇親会や茶話会をよく催したが、この琴や三味線の音に合わせて謡や踊りが披露される、家庭音楽会もそんな小さなイベントのひとつだったと思われる。

法律科の初代主任教師だったジョン・ウイグモアの夫人は、そんな音楽会に招かれ、「福澤家のパーティはまるでアラビアンナイトのようで、娘たちによる琴の演奏や美しい踊りに、恍惚となつておとぎの国に來たようだった」と記している。

音楽を楽しむ集う

今年の冬も音楽はほっと。10回目を迎える 矢上キャンパス「ウィンターコンサート」

矢上キャンパスでは12月18日、今年も恒例の「ウィンターコンサート2009」が開催されます。矢上実行委員会の塾生により企画・運営され、2000年にクリスマスコンサートとしてスタートしたこのイベントも今回で10回目を迎えます。理工学部・理工学研究科の年末を締めくくる催しながら、地域の方々にも冬の恒例行事としてすっかり親しまれており、毎年たくさんの方が矢上キャンパスを訪れます。例年、ピアノやバイオリンの独奏や合奏、アカペラコーラス、ポップス系のグループのパフォーマンスなど、出し物はいろいろ。もちろん雰囲気盛り上げるクリスマスナンバーもラインアップ。今年も多彩なプログラムが計画されており、出演者は理工学部の学生、教職員だけでなく、近隣住民の方など多岐にわたり、音楽腕自慢が多数参加してくれま。

クリスマスツリーの飾り付け、学生手作りのクッキーは子どもたちに大人気。キャンドルライトが灯されたテーブルを囲んで、軽食や飲み物をいただきながら、出演者も観客も一緒にあって和気あいあいとした雰囲気です。楽なコンサートです。理工学部にご縁がある方もない方も、塾生も塾員も、冬



の一日、矢上キャンパスではほんと温かいひとときをお過ごしください。

毎年楽しみにしているクリスマス、でも今年

サンタが病院にやってきました！ 今年もやりませ、慶應義塾大学病院サンタ企画



が病院に入院して12月25日を迎えることになってしまった。ちょっと寂しい……。こんな患者さんたちの笑顔を見たくて、慶應義塾大学病院では今年も「サンタ企画実行委員会」が、すてきなクリスマスプレゼントをお届けします。看護医療学部・医学部の塾生たちが、思い思いに工夫した衣装を身に付けて、かわいいサンタや怪しいトナカイに扮し、入院患者さんにメリークリスマスの笑顔とともに、クリスマスカードを手渡しします。そして恒例となったお楽しみは、学部の垣根を越えて、義塾のいろいろな音楽サークルで活躍する塾生たちによる、病棟での音楽生演奏です。思いがけない生演奏に心いやされて、涙を流して喜んでくれる患者さんいれば、なかには、いつものパジャマからわざわざきちんとした洋服に着替えて、演奏を堪能してくださるクラシックファンの患者さんもあります。たとえ病院で過ごすクリスマスでも、少しでも楽しい思い出をつくっていただきたいと、実行委員会のメンバーは忙しい勉学の合間を縫って、今年もすてきなクリスマス企画を立てています。



音楽を通じた交流

普通部、中等部、湘南藤沢中等部、幼稚舎 若さあふれる「四校ジョイント・コンサート」



SPからLP、CD、デジタル配信へ これからもずっと音楽の発展を見守りたい



いしざか けいいち
石坂 敬一
(社) 日本レコード協会 会長

を持っていったこと。これは、日本の音楽文化の豊かさを示す証拠であり、われわれは誇りに思うべきです。

さて、音楽を「音」として記録できるようになったのは1877年。エジソンが円筒式の音声再生装置を発明し、87年にはエミール・ベルリナーが円盤式の装置を完成させました。その3年後に駐日アメリカ大使が明治天皇に再生装置を寄贈したのが、日本で最初の「レコードプレーヤー」ということになりました。1910年には日本初のレコード会社、日本蓄音器商会（現コロムビアミュージックエンタテインメント(株)）が設立され、15年発売の松井須磨子「カチューシャの唄」は2万枚のヒットを記録しました。

戦後はアメリカの影響を受けながらも、美空ひばり、江利チエミ、雪村いづみの3人娘がスターになり、やがて藤山一郎、三橋美智也、春日八郎などから徐々に日本独自のヒット曲が生まれ、レコードセールスも急上昇しました。

SP盤はLPになり、80年代にCDに変わり、98年には6075億円を売り、これがCDのピークでした。2000年以降は、デジタル音楽の配信が急速に増えています。

音楽産業100年の発展には「スーパースターの登場」「新しい音楽ジャンルの確立」「技術革新による新しいキャリアの登場」という

3つの大きな要因があります。キャリアとはLPやCDなどを指し、デジタル配信も新キャリアです。ただしデジタル配信は、新しい音楽ファンを増やし、利便性を高めるというメリットは大きいものの、一方で違法サイトからのダウンロードが正規配信を上回るほどに蔓延しています。そのためアーティストや作曲家・作曲家に正当な利益が配分されなくなり、音楽産業そのものを苦しめています。日本人はモラルが高く、CD時代に海外で海賊盤が出回っても、日本ではほとんど見られませんでした。しかしデジタル配信では日本でも違法行為が増えています。日本レコード協会では、ネット上の違法流通撲滅のための運動に力を入れています。若い人の中には無意識に違法サイトからダウンロードをしている人もいるのではないかと思います。それは楽しむべき音楽そのものの首を絞めることとなります。

最後に繰り返しひとこと、「ストップ、違法ダウンロード」を強くお願いします。

紀元前7世紀の中国・周の六芸に「楽」が含まれるように、音楽は文明の発芽と同時に生まれ、人々に愛され続けています。わが国でも、古来の神楽に大陸からの唐楽や林邑楽を取り入れ、大宝律令成立時には雅楽寮が設けられ宮廷が音楽を保護しました。その後も朝廷は雅楽、武家は能楽、僧侶は声明、そして大衆は応仁の乱以降、歌舞伎を軸に小唄や端唄を生みました。特筆すべきは、西洋音楽が宮廷と教会から一方方向に広がったのに対し、日本人は歌舞伎から派生した独自の大衆音楽